

特 別 講 演 抄 録

## I. 分裂病患者の回復像について

人見一彦

近畿大学医学部精神神経科学教室

E. Bleuler が精神分裂病という名称を提案して以来、すでに90年が経過したが、分裂病の長期経過を見ると、1/3は治癒するものの、1/3は家庭内生活レベルにとどまり、1/3が依然として不良経過をたどる。今世紀始めにおいても、1/5は自然治癒することが観察されている。経過に影響を与える要因として、人格の発展傾向、家族関係、遺伝負因などが取り上げられているが、これらは個々の症例においてさまざまに組み合わせられ、しかも分裂病の経過像、回復像を論ずる際に難しいことは、それが患者の自己の形成、患者の人生と密接に結びついていることである。このことを、著者が長期にわたり治療している症例を通じて考察した。

症例1 (34歳、独身男性、生来より、人格の分裂傾向顕著) では、自己に関する認識は空想的で、幼稚であり、両価的な態度が認められ、「感情論理」の関連系 (Ciompi) が統合されておらず、そのために極めて制限された対処行動しか取れず、再発を繰り返す。しかし、仕事の「枠組み」が決められ、「趣味の生活」との調整がはかれると、周囲との不断の葛藤が回避され、社会的活動が可能になる。症例2 (42歳、独身男性、分裂気質) では、「要領が悪い」ために、社会適応に困難をきたすが、内面の愉しみと職業生活を、意識的にも、時間的にも分離すると、「心のゆとり」が得られ、社会生活

が可能になる。症例1, 2では、陽性症状が中心的に認められた。症例3 (37歳、独身男性、分裂気質) では、回復像は望ましいものではなく、陰性症状が顕著に認められ、家庭内生活レベルにとどまるが、ささやかな日々の生活の愉しみを持っている。症例4 (46歳、独身男性、ほぼ健康な性格) では、発病後十年を経過した頃より、陰性症状が強くなるが、やはり日々の生活の愉しみを持ち、迷い込んできた猫を可愛がるという「やさしさ心」を失っていない。症例5 (43歳、既婚男性、健康な性格) では、他の4症例と違い、経過に与えるリスク・ファクターはほとんど認められない。社会的治癒とみなされるが、職業における課題処理能力は明らかに低下している。

分裂病患者の回復像は、症例1, 2に見られるように、生活史的出来事との相互作用を繰り返しつつ、分裂気質に代表される人格発展傾向にふさわしい形で決定される。症例5のように、健康な人格に近づくほど、回復像は特徴的なものではなくなる。性格にあった職業の選択は、健康者においても望ましいものであるが、これが極端な形で示される。

最後に、症例3, 4, 5で見られる陰性症状と脳機能障害との関連について触れた。このような症例でも、Kraepelin の昔から、自然回復が期待できないわけではない。